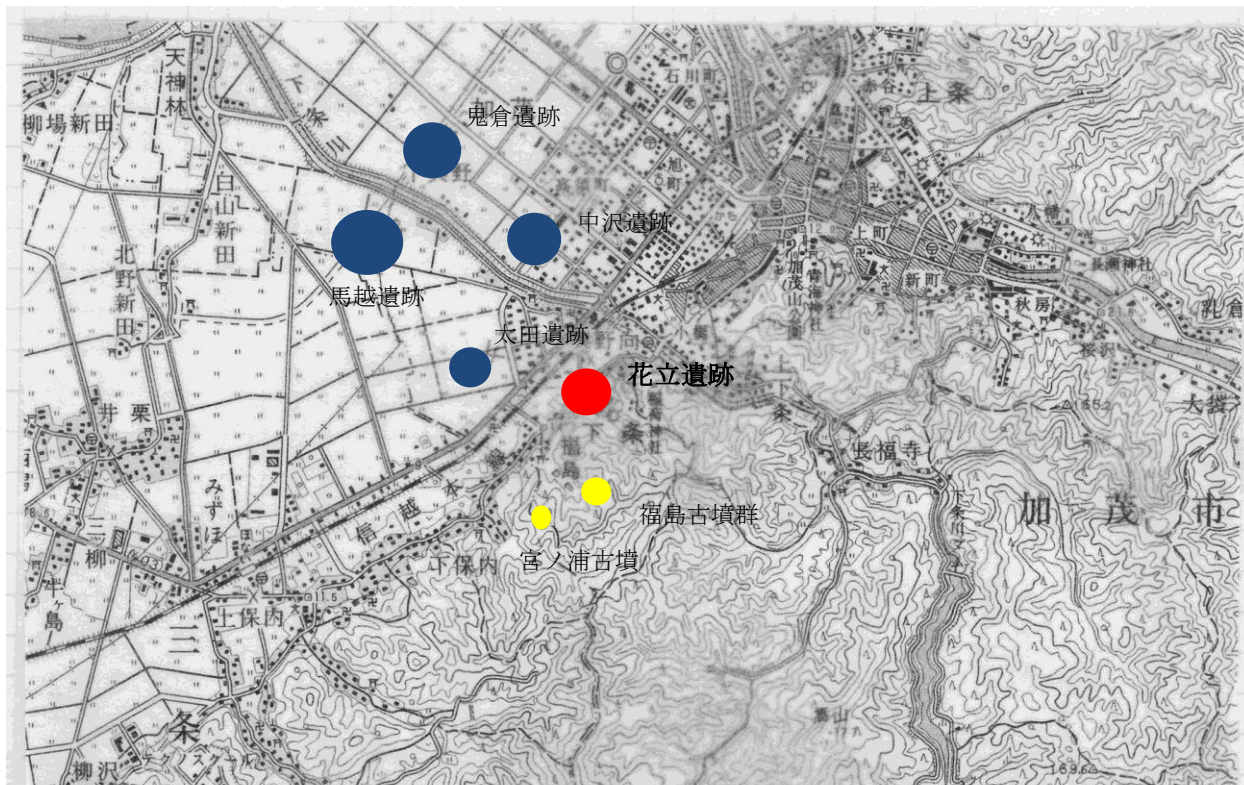


## 1 はじめに

花立遺跡は加茂市大字下条字福島地内に所在します。調査は、市道福島線建設工事に先立ち、加茂市教育委員会が主体となり、令和2年度約914㎡、令和3年度約469㎡、令和4年度約980㎡（上層682㎡、下層298㎡）、令和5年度約239㎡の発掘調査を実施してきました。令和6年度の上層面の調査面積は約685㎡です。下層面の調査を残していますが、上層面（平安時代）の調査面積の合計は約2,989㎡となります。

## 2 立地と周辺の遺跡

花立遺跡は下条川左岸の丘陵縁辺部に位置し、緩やかな傾斜を持つ微高地に立地します。現在の水田面の標高は約13m前後です。下条川流域には多くの古代の遺跡が確認されています。発掘調査された遺跡は右岸側で多量の墨書土器が出土した鬼倉遺跡、大型の建物跡が確認された中沢遺跡、左岸側では初期荘園と見られる馬越遺跡、炭化米塊が出土した太田遺跡があります。ほとんどが8世紀中頃に集落が開発され、9世紀中頃～後半を主体とし、10世紀前半頃まで継続しています。花立遺跡の後背部の丘陵には古墳時代前期に造営されたと考えられる宮ノ浦古墳（1基）、福島古墳群（5基）が所在します。



花立遺跡と周辺の遺跡位置図

### 3 遺構について

今回の調査区からは、一定の間隔で並びながら、群をなして延びる細長い溝が多数（約40条）確認されました。大きくは北東～南西に延びるものがあり、細かく見ると少し向きを違えるものもあります。どちらも計画性をもってつくられたものとみられます。前者は約2m間隔、後者は約1.5m間隔で並んでいます。これらは、馬越遺跡でも多くみられましたが、性格としては畝状遺構と考えられます。また、北東部でみつまっているものは、北西から南東方向に延びる長い溝の上につくられていることが遺構の切り合い関係からわかります。この長い溝は、畝を作る際の区画を意図したものとみられます。

このほかに、大小の柱穴が多数確認されています。この中で、柱穴が北西から南東方向に延びる溝と平行する向きに並んでいるものが注目されます。ひとつは柱穴3基で、2.6～2.7m間隔で並びます。もうひとつは柱穴5基で、2.8～3.1m間隔で並びます。後者のものは、南西側に柱穴がいくつかみられることから、同様の柱列が確認されれば、側柱の掘立<sup>ほったてぼしらたても</sup>柱建物の可能性があります。明確ではありません。いまのところ、柵や塀があった可能性が高いものと考えています。

また、畝状遺構と柱列の間は約2mの距離があり、遺構もないことから、通路として利用されたのではないかと推測されます。

### 4 遺物について

少量の須恵器<sup>すえき</sup>・土師器<sup>はじき</sup>が出土しています。須恵器は大半が佐渡の小泊窯産<sup>こどまりよう</sup>のもので、年代は平安時代の9世紀中頃が中心です。須恵器は無台杯や甕、土師器は甕・鍋などの煮沸具があります。墨書土器は少ないですが、「太」と読めるものが出土しています。

### 5 まとめ

今年度の調査区では、多数の溝跡（畝状遺構）が特徴的で、畑地であった可能性を示しています。生産の場所であったことから、生活の道具類の出土が少なかったものと考えられます。

これまでの調査で、花立遺跡には田地の管理を担った在地の有力者が存在した可能性が墨書土器や祭祀具などから指摘され、農業経営の拠点であった場所であったことは間違いのないところです。今年度調査区でみつかった畝状遺構もその一端を構成する重要な遺構と考えられます。

最後になりますが、今回の発掘調査並びに説明会を開催するにあたり、近隣にお住いの皆様、関係機関の方々、㈱日立ニコトランスミッション加茂事業所様から多大なご協力を頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。